

2020年11月1日 久宝教会 召天者記念礼拝（降誕前 第8主日礼拝）

メッセージ「神様が共に歩まれた生涯」

牛田匡牧師

聖書 イザヤ書 44章6-7節

今日は先に天に召された方々のことを偲び、思い出す「召天者／永眠者記念礼拝」です。カトリック教会では、聖なる「諸聖人の日」や「聖徒の日」と呼ばれて来ましたが、要するに日本的に言えばご先祖様が返ってくる「お盆」のようなものでしょう。その前日がいわゆる「ハロウィン」ですが、今年はコロナへの対応として「3密」を防ぐために日本各地のハロウィン・パーティーも、ここ数年に比べると、控え目だったようです。

同じ10月31日は、カトリック教会に対するプロテスタント教会の「宗教改革記念日」でもあります。今から503年前の1517年の10月31日に、ドイツのヴィッテンベルク城の教会の扉に、マルティン・ルターが「95箇条の提題」を貼り出し、そこから「宗教改革」が始まったということで、それを記念する日なのだそうです。ルターがこの日を選んだのも、いわゆる「お盆」「諸聖人の日」を記念して、多くの人々が町に集まって来ていたから、その頃合いを見計らっていたのだと考えられています。

世界各地で、ご先祖様に思いを馳せる具体的な時期や方法は違っていますが、先人たちがいなければ、今の私たちは存在しなかったわけですし、共に生きた仲間が、神様の御許に召され、旅立って行った後に、どのように過ごしているのか、安らかに過ごしてほしいと願うのは、文化や宗教、習俗というものを越えて、世界中で共通している思いなのではないかと思います。

人類はサルから進化して来たと考えられていますが、サルからヒトへと進化していく中で生まれて来たのが「こころ」であり、それは「仲間の死を悼む」という行為として、観察できるという話を聞いたことがあります。紀元前35,000年～65,000年頃のネアンデルタール人の遺跡であるイラクのシャニダール洞窟では、花粉に囲まれた骨が発見され、最古の埋葬の跡

ではないかと長らく考えられて来ました。近年では、それは埋葬ではなく、他の小動物が花を運んだのではないかという説もあるようです。ですが、もう少し時代が下ると、今から約 12,000 年前の墓地遺跡からは、明らかに沢山の花をお供えして埋葬した跡が発見されているそうです。

チンパンジーの研究では、チンパンジーが人間に近い脳を持ち、高い知性を持つことが明らかにされていますが、チンパンジーは仲間や子どもの死に対して反応を示しつつも、その仲間を弔い、埋葬するということはなく、いつの間にか忘れていくのだそうです。そこにサルとヒトとの違いがあるのではないのでしょうか。

人々は大昔から、家族や仲間の死を悼み、悲しみ、埋葬して来ました。そして折々に死者を偲び、思い出して来ました。それは先人たちの歩みに思いを馳せ、その人たちと出会い、共に歩めたことに感謝を覚えると共に、今は生きている自分たちもまた、その先人たちと同じように土に還って行く有限な存在であるということに目を向ける機会でもありました。

今日、私たちは「召天者記念礼拝」を守ります。この一年間を振り返ると、とりわけこの春からのコロナ禍の中で、私たちは死を強く意識させられたのではないかと思います。しかも、その死は今までに体験したことのない形で迫って来ました。「何故、こんな形で死がやって来たのか」……。十分に嘆き悲しむ手段も時間も与えられないという方々も少なくありませんでした。今もまだ戸惑い、悩み苦しみ、悲しんでいる方々が、多くおられることと思います。そのような私たちに聖書は何を語りかけているのでしょうか。聖書の言葉に聴いていきましょう。

今回の聖書の箇所は、ヘブライ語聖書から預言者イザヤの言葉でした。紀元前 6 世紀、南ユダ王国は新バビロニアによって滅ぼされ、人々はアラビア砂漠を越えて遙か遠く、何百キロも離れたバビロンまで、捕虜として連れて行かれました。「バビロン捕囚」です。それを古代イスラエルの人々は「自分たちがイスラエルの神の言いつけを守らなかったから、罰としてそうなったのだ」と理解しました。そして捕囚から約半世紀の後、ペルシ

ヤにより新バビロニアが滅ぼされると、古代イスラエルの民はバビロン捕囚から解放され、祖国への帰還が許されるようになりました。今回の「イザヤ書」44章は、そのようにバビロンの地にいた捕囚の民に対して、主なる神が赦しと救いを宣言して、これから祖国への帰還が始まるという場面で語られた預言の言葉です。

6節「イスラエルの王なる主、イスラエルを贖<sup>あがな</sup>う方、万軍の主はこう言われる」。ここで言われている「贖う」という言葉の意味は「買い戻す」です。バビロンの地で捕虜とされ、奴隷とされていた古代イスラエルの人々が、誰かの奴隷となっていた状態から、身代金を払ってもらって自由な身に買い戻されるということです。「自分たちは神様の言いつけを守らなかったから、異国の地で異邦人の捕虜、奴隷になっている」と思っていた人々が、他でもないイスラエルの主なる神によって赦され、買い戻され、再び故郷、祖国へと帰ることが出来るようになる、ということです。

その主なる神は言われました。「私は初めであり、終わりである。私のほかに神はいない」。この言葉は「イザヤ書」の中に何度か登場する言葉（41：4、48：12）ですし、新約聖書でも「ヨハネの黙示録」にも「私はアルファであり、オメガである」（1：8）と記されているように、唯一絶対なる神を表わす典型的な表現でした。「あっちに何々の神様がいて、こっちには何々の神様がいる」。神様とは、そのような「いたり、いなかったりするような存在」ではなくて、この世界の初めであり終わりである……。即ちこの世界の全てを創られた存在、全ての命の与え主であり、命を贖い救い出される方である、ということです。

今回の「招きの詞」は、「ローマの信徒への手紙」から「キリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより<sup>あたい</sup> 価なしに義とされるのです」（3：24）という言葉でした。神が人となったイエス・キリストが、その言葉と振る舞い、死と復活によって、全ての人々を価なしに罪から贖って下さっています。一人一人の人が、何をしたか、何が出来たか出来なかったということに関係なく、神様をはずれた生き方（罪）から、神様の御許へと買い戻され、引き戻されています。だからこそ「私は世の終わりまで、いつ

もあなたがたと共にいる」(マタイ 28:20) という言葉もあるのでしょうか。

クリスマスに生まれたイエス様は、「その名はインマヌエル(神は私たちと共におられる)と呼ばれる」と「マタイによる福音書」(1:23)には記されています。また「イザヤ書」の43章には次のような言葉もあります。

<sup>1</sup>イスラエルよ、あなたを形づくられた方／主は今こう言われる。  
恐れるな。私があなただを贖った。／私はあなたの名を呼んだ。  
あなたは私のもの。

<sup>2</sup>あなたが水の中を渡るときも／私はあなたと共におり  
川の中でも、川はあなたを押し流さない。  
火の中を歩いても、あなたは焼かれず／炎もあなたに燃え移らない。

「神様はいつでも、どこでも、あなたと共にいる……。私たちと共にいて下さる……」。これが、聖書の語っている神様の中心的なメッセージです。

今日、この場に写真を並べさせて頂いた方々、また週報の中にお名前を掲載させて頂いた方々は、この教会の教会員や、またこの教会や法人を支えて下さった方々、またご縁のあった方々です。その他にも、ここには名前を掲載していない方々もおられます。神様はそれらお一人お一人の方と共におられました。中には、誕生して間もなく、天に召された赤ちゃんもいました。私たちの目から見ると「なぜ」としか言えないような生もあり、また死もありました。しかし、神様は紛れもなくそれらお一人お一人と共におられ、その命を贖い、救い出して下さっています。

私たちが、神様と共に歩む道を選んだのではなく、神様が私たちと共に歩いて下さっています。今日私たちが記念する方々お一人お一人が「神様が共に歩まれた生涯」を送られました。私たちはその生涯の一時、一部分を共に過ごさせて頂いたことに感謝し、出会わせて頂いたことに感謝して、今日もこの地上での歩みを、神様によって神様と共に歩まされて行きます。